「神様が望んでおられること」テサロニケ人への手紙第一 5 章 16-18 節

2023.1.1　元旦礼拝

序論）

1 月 1 日、元旦礼拝であり、主日礼拝の日である今日、みなさんと一緒に礼拝をして一年をはじめることができて心から感謝しております。

振り返ると昨年も、色々なことがありました。2019 年からコロナ禍がはじまりましたが、昨年はついに教会員の中にもコロナに感染する人がでてきましたし、私の家族もコロナに感染しました。幸い、重症化することはありませんでしたけども、私一人でギター奏楽とパワーポイント操作と司会とメッセージをした。あの日の礼拝は、なかなか大変だったことを覚えています。

また、2 月にはロシアによるウクライナ侵攻がはじまり、いまもその戦いは続いており、ウクライナでは多くの人が悲しみの中を歩んでいます。

また、私が代務教師をしている日高キリスト教会では、大きな病かかっている姉妹がいたり、新会堂が建築されたり、担任教師の山崎先生が辞任を表明したり、それに付随して色々なことがおこったりしました。ただ、一人の姉妹が洗礼を受けることができたのは感謝なことだったと思います。

また、伝道面で考えると、今年もオープンチャーチをすることができず、私が個人的に訪問してもいいですかと電話しても断られたりして、なかなかうまく行かなかった思いをしています。そんな中で感謝なのは、この冬の JJ キッズクリスマス会には多くの子どもと保護者の方が来てくださったことでしょうか。

総じて、昨年を振り返ると、感謝なことも確かにありましたけども、中々大変なことが次々と起こったそんな一年だったように思えます。

そして、それはみなさん、お一人お一人の個人レベルや、それぞれのご家庭レベルで考えてみても、私が知らない問題や課題を抱えながら一年を過ごされた方も多いのではないでしょうか。

そのような状況の中で、昨年はほぼ一人で早天祈祷会のお祈りの時をもっていましたが、その中で私が祈るように導かれていたことは、みなさん、お一人お一人のうちに主の喜びがあるように、主にあってみなさん一人ひとりが笑顔でいることができるように。ということでした。

もちろん、みなさんから教えていただいている祈りの課題は、それぞれ具体的に祈らせていただきましたが、私が最終的に導かれた祈りは、まさに教会に喜びがあるように。という祈りでした。

聖書をみると、喜びという言葉は、747 回も使われていて、「喜びなさい」という命令は、旧約聖書にも新約聖書にも書かれている命令で、新旧あわせると 16 回「喜びなさい」と聖書は私達に命じています。

みなさん、なぜわたしたちは喜ばなければならないのでしょうか。それは神様が、私達が喜ぶことを望んでおられるからです。　今日のみことばである

5:16 いつも喜んでいなさい。
5:17 絶えず祈りなさい。
5:18 すべてのことにおいて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

というみことばは、恐らくみなさんよく知っておられるみことばだと思いますが、神様が私達に望んでおられることが明確に示されている箇所なので、私達はこの明確な主のみこころを、今年一年のテーマとして受け取っていきたいとおもいます。

テサロニケ人への手紙の背景）

では、まずこのみことばを理解するために、この手紙の背景を簡単に確認しましょう。

この手紙の著者パウロが、テサロニケの教会を立て上げたのは、パウロが**2回めの伝道旅行をしたときでした**。パウロは2回目の伝道旅行でも、エペソがある小アジア地域で伝道をしたいと思っていたのですが、聖霊様がエペソに直接いくことを禁じ、マケドニア人の幻をみせたので、パウロはヨーロッパ方面に伝道にいくことになりました。そこで最初に行ったまちがピリピであり、ピリピの次に行ったまちがテサロニケの町だったのです。

ところが、パウロはそのテサロニケの町には、3,4週間ぐらいしか滞在することができませんでした。なぜならば、パウロがテサロニケの町で福音を伝えたことによって、一部のユダヤ人と大勢のギリシャ人がイエス様を信じましたが、それが他のユダヤ人たちの妬みをかうことになってしまい、その妬みに駆られたユダヤ人は町にいる「ならずもの」を集めて暴動を起こしてしまいました。

その結果、パウロたちは夜逃げするようにしてテサロニケの町を離れ、ベレヤという町にいくことになります。しかし、なんとテサロニケで暴動を起こしたユダヤ人たちがベレヤにもやってきて、そこでも群衆を扇動して騒ぎを起こしました。そのため、パウロはベレヤを離れてアテネにいきます。そして、そのアテネで、テサロニケの教会の人たちのことが心配になったパウロは、テモテをテサロニケに様子を見に行かせました。

そして、パウロはアテネの後、コリントにいき、そのコリントでテモテと合流して、テサロニケの人たちの状況をしり、改めてテサロニケの教会の人たちあてに書いた手紙が、このテサロニケ人への手紙になります。

テモテからテサロニケの状況を聞いたパウロは、彼らが信仰と愛をもって歩んで

ることを聞いて神様に感謝しましたが、同時にパウロが去ったあともテサロニケの教会にはユダヤ人からの激しい反対と迫害が続いていることを聞いたようです。だから、そんな教会の人たちを励ますために、キリストの再臨について語り、そのキリストの再臨を待ち望んでいる教会の人たちが、具体的にどのように歩むべきかを教えているのがこの手紙です。

今日の箇所は、その具体的なキリスト者の生き方を教えている 5 章の中の中心となっている箇所です。さて、そのようなテサロニケの教会の状況を踏まえて、今日のみことばに目を向けていきましょう。

いつも喜んでいなさい)

まずは 16 節の「いつも喜んでいなさい」という命令に目をむけていきたいと思います。これは新約聖書の中で一番短いみことばだといわれています。しかし、短くても中々実践するのが難しいみことばだと、皆さんは思うのではないでしょうか。

なぜならば、「嬉しい時に喜びなさい。」とか、「楽しい時に喜びなさい。」と言われたならば、それは特に苦労することなく喜べますが、「苦しい時に喜びなさい」とか、「辛い時に喜びなさい」といわれたら、それは無理だと感じるからです。

なぜならば、自分にとって都合のいいときは喜べるけども、自分にとって都合の悪い時は喜べない。という現実があるからです。

でも、聖書は「都合のいいときだけ喜びなさい」とはいわず、「いつも喜んでいなさい」といっています。これは当然、当時のテサロニケの教会が直面していた迫害の中にあっても喜びなさい。という意味が含まれています。

なぜ、パウロはこんな無茶な命令をしているのでしょうか。それは、たとえ、激しい迫害の中にあっても、私達の喜びの元となる事実があるからです。それは何かというならば、私達とキリストの関係であり、私達と主との関係です。

パウロは、18 節の後半でこのように言っています。

5:18b *これが、キリスト・イエスにあって神*があなたがたに望んでおられることです。

つまり、喜ぶというのはキリストにあって喜ぶということです。さらにピリピ人への手紙にも同じような命令をパウロが書いています。それはどのような命令かというとピリピ 4 章 4 節にはこうあります。

4:4 いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。

何にあって喜びなさい。と書いていますか？　そう「主にあって」ですね。
私達は「キリストとの関係において」そして「主との関係において」喜ぶことが求められているのです。なぜ？　キリストとの関係、主との関係は、たとえ激しい迫害にあったとしても、変わることのないものだからです。聖書はいつも、この変わらないものこそが一番価値の在るものだと教えています。

　みなさん、なぜ、私達と主との関係は変わらないのでしょうか。それはどんな状況にあったとしても、神様からの愛から私達は切り離されないからです。いつも読んでいる箇所ですけども、ローマ 8 章 35-39 節を読みましょう。

8:35 だれが、私たちをキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。
8:36 こう書かれています。「あなたのために、私たちは休みなく殺され、屠られる羊と見なされています。」
8:37 しかし、これらすべてにおいても、私たちを愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。
8:38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、
8:39 高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

　みなさん、私達がどんなに厳しく、苦しく、悲しい状況にあったとしても、私達は神様の愛から決して引き離されないのです。なぜならば、たとえ死に直面することがあったとしても、キリストの贖いによって私達が救われ、神の子とされたという事実は、変わらないからです。だから、たとえこの世で愛する家族や兄弟姉妹と別れる事になったとしても、神の家族である私達の関係は切り離されることがないし、どんな状況であったとしても、私達は神の子なのです。たとえ、この世のいのちが尽きたとしても、私達が救われ神の子であることは変わりません。
　だから、私達はこの変わらない主との関係において、いつも喜んでいることができるのです。みなさん、そのためには自分と神様との関係をいつも思い出して行くことが大切です。みなさんは自分が救われた時の出来事を覚えておられるでしょうか。私は、この 2023 年はですね。月に一回でもいいから、私達の救いの証しを共有して、みなさんと一緒に喜んでいくときを持ちたいなと思っています。

絶えず祈りなさい）

続けて、17 節を読みましょう。

5:17 絶えず祈りなさい。

これも困った時だけ祈りなさい。苦しい時だけいのりなさい。とはいっていません。苦しい時も、悲しいときも、嬉しいときも、楽しい時も、絶えずいのる。これが、キリスト・イエスにあって神様が私達に望んでおられることです。

よく「祈りの課題がありますか？」ってきくと、「今、特にいのることはありません」っていう人が結構いるんですけども、みなさん、助けてほしいことだけを祈るのが祈りではありません。感謝なことも、うれしいことも、なんでもないことも祈るのが祈りなのです。

もっというと、自分からは何もいわないのも祈りなのです。例えば「神様、わたしにみこころを示してください」と言った後、じっと黙って神様が示してくださることを待ち続けて沈黙する。っていうのも祈りなのです。

つまり、主と交わりをする、自分の言いたいことばかりをいうのではなくって、主からの導きも聞いていく。これが祈りなのです。

「絶えず祈りなさい」の「絶えず」とは「隙間なく」という意味でもあります。主はですね。片時もはならずに、いつも私達と交わりをすることを求めておられるのです。これは言い換えるならば、主が共におられないかのような時間を持たない。ということです。嬉しいときも、悲しい時も、働いている時も、遊んでいるときも、いつも私と共に主がおられる。それを忘れずに、いつも主と交わりながら歩んでいく。そのようなことを主は求めておられるのです。

でも、多くの人はこころの中にスイッチをもってしまっています。祈るときのスイッチと祈らない時のスイッチ、神様に思いを向けるときのスイッチと、自分のことをやろうとするスイッチ。そのようにして神様との交わりを切り替えてしまうのです。

みなさん、みなさんが仕事や、個人的なことをしているときも、主はみなさんと共におられます。一生懸命仕事をしているときも、すごく悩んでいるときも、心を痛めているときも、お風呂にはいってリラックスしているときも、主はみなさんと共におられるのです。だから、いつも、隙間なく、その主に語りかける。その主と交わる。それが絶えず祈るということなのです。

すべてのことにおいて感謝しなさい。）

そして、最後、18 節の前半「すべてのことにおいて感謝しなさい」について考えましょう。

喜ぶことは、いつも変わらない主との関係を喜ぶことだと言いました。
祈ることは、いつも共におられる主と交わることだと言いました。
では、感謝することはどうゆうことでしょうか。自分に都合のいいことが起こった時だけ、感謝するということでしょうか。当然、このみことばが指ししめす感謝はそのような感謝ではありません。

いのりが聞かれた時だけ、感謝する感謝ではありません。
この世のあらゆること、すべてのことに対して、神様が主権をもっておられる。
そのことに対して感謝しなさい。ということです。

新聖歌 252 番の「やすけさは川のごとく」という賛美があります。
（軽く歌う「♪やすけさは　川のごとく♪」）というあの歌を書いたスパフォードという方は、絶望的な状況でも、神様の前で喜び、賛美し、感謝した人でした。
　彼は、弁護士であり、法医学の教授でもあり、教会の役員もしていました。
しかし、シカゴ大火災で全財産を失い、妻と四人の娘たちがヨーロッパに行くために乗った船が衝突事故を起こし、娘たち全員が亡くなってしまいました。
　そのような状況の中で、生き残った妻に会い行く途中、彼はこの新聖歌 252 番の賛美、「やすけさは川のごとく」という歌詞をつくって、歌いながら感謝をささげたと言われています。
　普通なら、「神様、どうしてこのようなことが起こるのですか？」といいたくなるような状況です。でも、そのような状況の中で、彼は神様に感謝して歌ったのです。
　この賛美の歌詞を読んでいきましょう。

1. 安けさは川のごとく 心ひたすとき
　悲しみは波のごとく 我が胸満たすとき
　全て 安し 御神共にませば

2. 悪しき者迫り来(く)とも 試みありとも
　御子イエスの血のいさおし ただ頼むわが身は
　全て 安し 御神共にませば

3. 見よ我が罪は十字架に 釘づけられたり
　この安きこの喜び 誰も損ない得じ
　全て 安し 御神共にませば

4. よし天地（あめつち）崩れさり ラッパの音と共に
　御子イエス現わるるとも などて恐るべしや
　全て 安し 御神共にませば

なぜ、彼はこのように歌ったのでしょうか。3 つの理由があります。
1 つは、どんなことがあったとしても、キリストの十字架による救いは、変わらないという確信があったからです。
2 つ目は、この世でどんな苦しみがあったとしても、世の終わりのとき、キリストの再臨のとき、私達の救いは完成するからです。
そして、3 つ目は、その世の終わりのときがくるまでの、たとえ悲しいことがあったとしても、悪い人たちがせめてきたとしても、この世の日々は、神様のご支配の中にあるからです。彼はそのことを知っていたから、「すべてやすし、御神ともにませば」と歌えたのです。

同じように家族を失い、自分自身も多くの苦しみを経験したヨブが、最終的にみちびかれたのは、

42:2 あなたには、すべてのことができること、どのような計画も不可能ではないことを、私は知りました。

という告白でした。苦しみのただなかにあってなぜ、そのようなことがおこるのかヨブにはわかりませんでしたが、最終的には、どんな苦しい状況にあったとしても、神様のご計画が実行される。ということが教えられて、ヨブは神様を賛美するようにされたのです。

だから、みなさん。すべてのことについて感謝するためには、すべてのことが自分の思い通りにならないと許せない。納得できない。という思いを手放すことが必要があります。たとえ、今、目の前の現実の意味がわからなかったとしても、なんでこのようなことが在るのですか？と言いたくなるようなことがあったとしても、

「すべて、私達の救い主のご支配の中にあり、私達の思いをこえて、神様の御業がなされることを感謝します。
　なぜならば、どんなことがあったとしても、私達と神様との愛の関係はかわらないし、どんな状況であったとしても、主は私達と共におられるからです。
　だから、私達を愛して、私達と共におられる主が、すべてのことを益と変えてくださることを信じて感謝します。」

そう祈っていくことが大切なのです。

まとめ)

　みなさん、いつも喜び、絶えず祈り、すべてのことに感謝する者となりましょう。それこそが、キリスト・イエスにあって神様が私達に望んでおられることなのです。